



岡崎市長
岡崎市徳川家康公顕彰推進協議会 会長

中根 康浩

令和3年1月、NHKから令和5年の大河ドラマ「どうする家康」を松本潤さん主演に放送の発表がありました。

徳川家康公のみを主役にした大河ドラマは昭和58年放送の「徳川家康」以来、実に40年ぶりになります。また、発表時は新型コロナウイルス感染症の流行の真只中にあり経済的な冷え込み感じていた時期にありました。

家康公生誕の地である本市としましては、千載一遇のこの好機に地域経済の起爆剤にしなくてはならない、そして観幸都市の創造という強い思いから、市内部に組織横断的な推進本部を設置し、大河ドラマ「どうする家康」がもたらす盛り上がりをも市民全体で共有し、人やまちが活気づく1年、まさしく「ドラマチックイヤー」となるように事業の企画、立案を指示いたしました。加えて、オール岡崎の体制を構築するため、市内の主要な経済団体と本市で構成する岡崎市徳川家康公顕彰推進協議会を設立し、機運の醸成、家康公生誕の地ならではの事業を展開してまいりました。

「どうする家康 岡崎 大河ドラマ館」の設置をはじめ、市内外のお客様の受け入れ体制を整える中、令和5年1月に初回放送の日を迎えました。本市におきましては、主演の松本潤さん、ヒロインの有村架純さんら主要キャストをお迎えしてのパブリックビューイング&トークショーの開催により、全国から大きな注目を浴び、同年1月に他に先駆け開館した「どうする家康 岡崎 大河ドラマ館」では、週末には入館待ちの列ができ、徐々に入館者が増える順調なスタートになりました。また、市制施行記念日の7月1日から夏休み期間に岡崎市美術博物館で開催した“NHK大河ドラマ特別展「どうする家康」”では、全国から厳選を重ねた国宝・重文50件以上をはじめとした、約150件の優品を展示し、多くの皆様に幾多の「どうする」に満ちた家康公の生涯を存分に楽しんでいただきました。

例年春に行っていた家康行列を10月に恒例の市民キャストに加えて、大河ドラマ「どうする家康」の主要4名のキャストをお迎えし、ドラマの舞台地であり、家康公生誕の地の岡崎を全国にPRする特別版として開催いたしました。また、この日は全国から多くのかたが本市にお越しになられることもあり、大河ドラマ館の入館料を無料とするスペシャル企画を実施しました。

令和6年1月の「どうする家康 岡崎 大河ドラマ館」の閉館日には、大河ドラマ「どうする家康」の制作統括の磯智明さんなどをお迎えしたトークショーを開催したのち、多くの家康公、そして大河ドラマファンの皆様に見守られるなかで閉館セレモニーを行いました。

開館から353日間の入館者数は、636,420名で、目標高くとした70万人の約9割の数値となり、連携事業を展開していた静岡市、浜松市の大河ドラマ館の入場者数と合わせると155万人を超える入場者数となり、ドラマと共に愛された大河ドラマ館であったと思います。

大河ドラマ「どうする家康」の放送により、全ての市民の皆様に若き日の家康公や三河武士団が一枚岩となって夢を見、活躍をした岡崎、そして平和の始まりの地という誇りや岡崎愛の醸成に繋がったものと自負しております。

今後は、大河ドラマを機に再認識した家康公生誕の地としてのアイデンティティを未来へ繋げていくため、岡崎市民が連綿と続く岡崎の歴史の重みに一層の誇りと愛着を感じられる取組みとして『もっと家康公“ど” まんなかプロジェクト事業』を進めるなど、「家康公生誕の地」を始めとする本市の魅力向上や地域活性化に資する施策を進めてまいります。

末筆となりましたが、素晴らしいドラマを制作されつつ様々なご助力をいただいたNHK大河ドラマ制作の皆様、キャストの皆様、名古屋放送局の皆様、愛知県知事を始めとする県の皆様、協調・連携していただいた静岡市、浜松市を始めとする他地方自治体の皆様、そして何かとご配慮賜った徳川御宗家様、岡崎市徳川家康公顕彰推進協議会の皆様、一緒に盛り上げていただいた市民団体・ボランティア団体の皆様、地域貢献いただいた企業の皆様、日々ご尽力いただいたドラマ館、観光売店そして観光案内所の運営事業者様とそのスタッフの皆様、最後まで岡崎を応援いただいた多くの皆様に心より感謝を申し上げ、巻頭のことばといたします。

徳川宗家19代当主・公益財団法人徳川記念財団理事長
岡崎市徳川家康公顕彰推進協議会 顧問

徳川 家広



大河ドラマ「どうする家康」も無事に放映を終了し、年が改まりました。それにもなつて岡崎公園内の大河ドラマ館も、その役目を終えて、もとの「三河武士のやかた 家康館」へと戻ることになりました。

大河「どうする家康」は、徳川家康公と三河武士団の深い絆と、彼らが分かち合った苦勞、危機そして栄達を描ききり、人間と組織の成長物語として、全国民に深い感動を残したと思います。また従来、老獪な策士、もしくは非情の覇者として描かれがちだった家康公が、同時代の誰にも増して喜怒哀樂の深い、むしろ現在を生きる私たちに近い感受性の人間として、青春時代から晩年までを余すところなく解き明かして、誰にとっても、より身近な存在となったのではないのでしょうか。誤解されがちだった日本史上の巨人である家康公が、一人の生身の人間として受け止められる契機となる、大切な1年間だったと思います。

ところで昨年は、岡崎市など徳川家ゆかりの土地にとっての大河イヤーであるのと同時に、明治維新から1945年の終戦までと、終戦から現在（2023年）までがちょうど同じ長さになるという年でもありました。これまで私たちは、戦前の日本こそが本物で、戦後はその陰か、はたまた戦前に戻るまでの中継ぎか、というように自分たちの生きる時間を捉えることが多かったのですが、昨年をもって、そのような曖昧な時代は終わりを告げたのだと、私は考えています。明治維新に始まった国家は正しく終戦によって滅び、今の、私たちの生きる日本は、戦争の惨禍についての反省によって、1945年に生まれた新しい国家なのだと、これでやっと誰にも遠慮なく言えるようになったのです。

戦後の日本、私たちの日本国は、完璧ではないにしても、江戸東京を中心として、国民ひとりひとりの尊厳が少なくとも建前上は保障される平和国家であり、何より家康公を支えた三河武士団の勇氣と美德に支えられた「岡崎的社会」であります。それは意外にも、晩年の家康公が夢見ていた日本と多く重なる国家であり、社会なのです。そのような転換点の1年に、日本国民が家康公と三河武士団の冒険に胸を躍らせていたことは、非常に意義深いことでした。もとの「三河武士のやかた 家康館」に戻った後も、現在の私たちの生きる歴史的時間の意味を、発信し続ける施設として、頑張っていくことを期待致します。

大河ドラマ「どうする家康」を終えて

大河ドラマ「どうする家康」制作統括・NHKチーフプロデューサー

磯 智明



岡崎のみなさんには、大変お世話になりました。岡崎では、徳川家康を親しみと尊敬を込めて、家康「公」と呼びますね。今から3年前、脚本家の古沢良太さんと取材で岡崎を訪れた時に、まずそのことを教わり、感激しました。近年の大河では、狸親父や策略家、ラスボスなど家康公がそれほど良いイメージとして描かれることがなく、歴史的にも時代によっても、家康公は評価が大きく変わる人物です。そのような人物が大河の主人公として今、ふさわしいのか、そんな迷いもあって、岡崎を訪ねたのですが杞憂でした。お会いする方々、自分の親御さんや親戚のように家康公をととても身近な人物として話してください、それも彼の人柄や優しさについて語るのが印象的でした。一般的に、地元の方が地域の戦国武将を語る時は、その人の武勇や強さについて話すことが多いのです。家康公の人間性を大切に描けばいいのかなというヒントをみなさんから頂きました。

また家康公を支えた三河武士団が、地域のヒーロー達としてとても愛されていることが、よくわかりました。明治政府は薩摩・長州がつくったと言われていますが、同様に江戸幕府は三河武士団がつくり、しかも彼らは全国各地に飛び、今の地方各地の基礎をつくりました。それは凄いことだと思います。三河武士団は戦争よりも、町づくりのプロフェッショナルなのです。それだけの人材を育んだ岡崎はどんな立派なところだろうと想像しますが、岡崎の方々はこのこととお話すると、みなさんとても恥ずかしがって、謙遜されます。そうした偉ぶらない謙虚さこそが、全国各地に溶け込み、その礎を築いた秘訣なのかなと思います。

岡崎で残念だったことは東海オンエアの方が、人気があったことでしょうか(笑)。全国には、家康が座ったかもしれない石を呼び水にして活性化しようとしているような地域もある中、岡崎には価値ある史跡がたくさん残されています。全国にある家康名所の総本山とも言うべきところが岡崎なのです。今、若い世代を中心に歴史離れが急速に進んでいます。桶狭間の合戦や関が原の戦い、江戸幕府を知らない人が大勢いるのです。

家康公の威光を長く語り継いできた岡崎の皆さんのおかげで今回、家康公を主人公として大河ドラマを制作できました。家康公はどのようにして長きにわたって平和な世を築くことができたのか、世界的にもその功績に注目が集まっています。でも外国人観光客は家康公を祀る日光に行っても、生誕の地・岡崎にはあまり行きません。僕は岡崎という地にこそ、その秘密があると思います。家康抜きでは、日本の歴史は語れません。ぜひ、これからも家康公の魅力について発信して、語り継いで頂きますようによろしくお願いします。そしてまた、いつの日か、家康公や三河家臣団のドラマを実現させましょう。ありがとうございました！